

未来が見えてくるとか

人口減時代の日本
第一部
少子化の風景

3人目を決心

ンクやインターネットなど近所がいつもいるのどの担当も決めている。木下さんと彦坂さん夫妻は、オープンと同時に千葉県から入居した。2人とも父親が転勤族で、地元と呼べる場所がない。木下さんは「地縁もなく、親も遠くに住んでいるから、家族だけで閉じこもった子育てになりがちだった。子供には、親以外の多くの大人に接してほしかった」と話す。ここでは、住人たちが気軽に広海ちゃんや遊んでくれたり、大地ちゃんを預かってくれる。その

3人目を決心

兵庫県芦屋市のコレクティブハウス芦屋17Cは、02年8月にオープンし、17世帯が入居できる。「17C」とは「各戸1度ずつのぬくもりが集まり17度の快適温度に」という意味だ。「かんかん森」



彦坂早苗さん(左から2人目)たちが共同で夕食を準備しているときに、のぞきにきた夫の木下孝二さんと二男の大地ちゃん＝平日明浩写真

「いただきます」。かんかん森は、老人ホームフリープログラマーの木下孝二さん(28)と、事実婚をしている彦坂早苗さん(29)夫妻が、長男広海ちゃん(4)、生後5カ月の二男大地ちゃんと夕食を始めた。すき焼き丼と卵スープがメニュー。東京都荒川区の「コレクティブハウスかんかん森」の食堂では、仕事から帰って来た住人が次々と夕食に加わり、だんらんが広がる。

変わりゆく「標準世帯」

コレクティブハウス

は、女性の社会進出が進んだ北欧で定着した集合住宅だ。独立した住戸のほか共用のスペースや設備があり、住人が家事の一部を分担する。03年6月にオープンした「かん

森」や「芦屋17C」のように、従来の血縁や地縁とは違いつながりを持つ「共生型」の生活を選択する動きが出ている。東京都新宿区の住宅街の一角でも、96年11月から共同生活が行われている。鉄筋4階建てのアパートに、母子が2組、単身の男女3人の5世帯7人が住む。2階が共用の台所・食堂と居間。3、4階の5部屋がそれぞれ

触れ合う生活

「標準世帯」(サラリマンの夫と専業主婦の妻、子供2人)が崩れている。60年には4・14人だった平均世帯人員数が、00年には2・67人まで減った。その背景には、単身の男女、子供のいない夫婦、母子・父子家庭の増加がある。

間(ま)に自宅で仕事をしたり、ガテンニングなどもあり、昨年8月、大地ちゃん(34)は「3人目を産むのが大変だったから、手伝いにいこう」と声をかけてくれる。真澄さんは「遠くの親戚より近く、不安にもつながっている」と話す。長女(7)が小学校に入学し、

地縁・血縁がなくても共生

は娘(2)と住んでいる。共同生活の中心は2階。台所でそれぞれが料理したり、ほかの住人とお茶を飲む。住人に抱っこされたNPO法人「コレクティブハウジング社」の宮前真理子さんは「共生型の生活は自分らしさを大切にしながら、孤立しない生活。ライフスタイルの選択肢として定着すれば、子育てが小さな家族で閉鎖的に行われることで少子化に結びついていく状況が変わるのではないか」と指摘する。

共生型

この連載は原敏郎、松田真、瀬尾忠義(東京経済部)、上野央絵、須藤孝大(政治部)、小林明子(佐賀支局)が担当しました。

この連載に対するご感想やご意見を、Eメールアドレスt.mirai@mbx.mainichi.co.jpに送ってください。03・3212・2493